

平成26年度 公益財団法人網走監獄保存財団事業報告書

基本方針の報告

当財団は、北海道の認可を受けて平成24年4月1日に「公益財団法人 網走監獄保存財団」として登記を完了し、博物館網走監獄の運営を唯一の公益目的事業として運営をし、さらに、それを財政的に支えるために収益事業を行ってまいりました。

公益財団法人へ移行してから3年間が経過しましたが、この間、公益法人関連三法を遵守する事に努めると共に、財務三原則を守り運営してまいりました。

それらを踏まえ、平成26年度の活動を締め括る報告書を事業計画に沿って報告してまいります。

政府は、経済再生・デフレ脱却と財政健全化をあわせて目指す事とし、競争力の強化により、民需主導の経済成長を促すほか、インフラ老朽化対策や東京オリンピック・パラリンピックを契機とした交通・物流ネットワーク整備の加速など、未来への投資を推進する事でスタートいたしました。

そう言う中であって、当財団は次の4つの基本方針を定め運営してまいりました。

- 1 登録有形文化財（10棟）の重要文化財指定。
- 2 充実した博物館の運営を図る。
- 3 展示建造物の防犯・安全対策と固定資産の取得。
- 4 経営の安定を図るため入館者の確保と収益事業の強化。

まず、当財団の運営の柱であります入館者数、入館料収入をそれぞれ21万人（前年度予算比5%と増）、184百万円（前年度予算比5%増）を見込み積極的な誘致活動を進めてきた結果、入館者数では208,618人（予算比99.3%）入館料収入で185,099千円（予算比100.6%）と目標を達成する事ができました。

以下、基本方針に基づき総括的なご報告を申し上げます。第2に当財団が保有し展示・公開している建造物の登録有形文化財（10棟）の重要文化財指定に向けての取り組みですが、平成25年度は、北海道地域づくり総合交付金と網走市の補助金を受け「五翼放射状平屋舎房」の移築復原・改修工事調査報告

書を作成して、北海道教育庁と文化庁へ報告いたしました。

平成26年度は、昨年度に引き続き北海道、網走市の補助を受け「庁舎」「教誨堂」等の残り9棟の調査報告書を纏め関係官庁に提出しています。現在は、より重厚な博物館を目指して、文化庁での審議会の審議を待っている状況であります。

第2に当財団が公益法人として継続していくためには、公益目的事業としての博物館の運営は重要な課題であります。このため、充実した博物館の運営を図る事を指標として、特別展を含め社会教育事業を中心に歴史博物館として、国の内外から訪れていただいた、多くの人に感動を与えるために努力をしております。

第3に展示建造物の防犯・安全対策と固定資産の取得についてですが、ここ数年展示の見直しとインフラ整備を進めてまいりましたが、今年度も引き続き「鏡橋」の建替えと展示施設の防犯と館内全体の安全対策を進めてまいりました。

第4に経営の安定を図るため、入館者の確保と収益事業の強化は自主自立の運営を進めている当財団においては重要な課題であります。入館料収入、収益事業を含めて予算を若干上回る形で確保する事ができました。

以下、詳細な事業実績は、各項目別にご報告いたします。

1 登録有形文化財(10棟)の「改修工事調査」重要文化財指定

平成 25 年度実施の五翼放射状平屋舎房の「移築復原改修工事調査」に引き続き、平成 26 年度は登録有形文化財となっている残り 9 棟（庁舎、教誨堂、二見農場建造物群、裏門、煉瓦造り独居房、哨舎 4 棟）の建造物の「改修工事調査」を実施しました。

調査は、北海道の歴史的建造物研究調査の権威、角幸博北大名誉教授（当館顧問）が代表を務める特定非営利活動法人 歴史的地域資産研究機構への委託事業として 4 月に委託契約を行い、数度の現地確認、書類の取りまとめを行い 12 月に委託先より完成品として報告書 150 冊の納品を受けました。

同月北海道教育庁を訪問、報告を行い、北海道教育庁を經由して文部科学省文化庁に報告書を提出しました。

なお本事業には、北海道より「北海道地域づくり総合交付金」が平成 25 年度 160 万円、26 年度 150 万円。網走市より一般補助平成 25 年度 100 万円、26 年度 50 万円、計 460 万円の助成を受け実施しました。

財団創設期に、網走刑務所木造建造物の調査を行った歴史的建造物の専門家より「網走刑務所建造物は重要文化財の指定を受けるに足る資質を持つすぐれた歴史的建造物」との言葉をいただいております、本事業は今一度、その価値を再認識し、将来的な重要文化財指定を受けるために必要な調査として進めてまいりました。

本年は調査にあわせ網走市、博物館網走監獄には貴重な歴史的建造物、文化財があることの認知を深めることを目的に、8 月に札幌から歴史的建造物の修復や維持活動に携わっている煉瓦、瓦の専門技術者を招聘し「文化財建築ワークショップ」を、10 月～3 月にかけて「企画展：文化財建築の技を繋ぐ・瓦、煉瓦と石職人」を開催いたしました。

今後も貴重な文化財、歴史的建造物を護る歴史博物館であることを国内外から訪れるお客様にアピールをすることにより、多くの方に博物館、文化財を見学していただける努力を続けてまいります。

2 充実した博物館の運営を図る

公益財団法人が運営する博物館として不特定多数の人に、網走刑務所旧建造物を通じ明治期の網走および北海道開拓の歴史を次世代に伝える活動を行い、さらに利用者の求める期待は何かを探り続け、全ての人の情操教育の一助となる公開講座や普及事業を計画実施しました。

(1) 博物館の社会教育事業

昨年度に引き続き、博物館が登録有形文化財 10 棟の重要文化財昇格を目指すことへのピーアル活動も含めて「文化財」をキーワードに事業を展開しました。

ゴールデンウィークイベント「文化財スタンプラリー」8月の夏休みには当館顧問の角幸博先生が主宰する歴史的地域資産研究機構に所属し、文化財建築の修復に携わっている瓦、煉瓦の職人お二方を講師に招聘し「文化財建築ワークショップ」を2日間にわたり開催しました。瓦屋根に登り瓦の感触を体感してもらいながら、干支瓦の色づけに子供たちも夢中で取り組んでいました。

煉瓦をアーチ状に積む、煉瓦職人体験など日頃経験することのない道具や建築資材を目の当たりに遊びながら学ぶ楽しいワークショップとなりました。

10月の文化財月間に合わせて無形文化財能楽者永島充先生をお迎えし、「日本の心・能と狂言」ワークショップを開催しました。網走で日頃鑑賞する機会のない古典芸能に触れ、実際に謡いや舞いを習い参加する形式のワークショップに管内各地から大勢の参加者がありました。

物づくり体験講座は、秋の自然体験麦わらを使用した「ホタルの虫かご作り」「栗を染めてエコバック作り」両講座とも、館内の栗や麦を集めて行う自然の恵みを暮らしに生かす狙いの講座です。参加者もオリジナル作品を完成させ持ち帰り満足した様子でした。

その他、冬休みスノードーム作り、干支の羽子板作りなどの新しい講座には子供から大人の方まで多数の参加がありました。従来の刑務所作業の追体験講座には織物作家本間先生をお招きし「流氷織り」を開催するなど8講座いずれも定員を超える応募がありました。

長期連続講座として網走刑務所の特徴である農業を主体に農園体験ワークショップを5月から11月まで7回にわたり開催し、レンガブロックや木柵など農業景観も楽しんでもらいながら植え付けから収穫体験の作業を行い、「二見湖畔神社収穫祭」へと繋がりました。収穫祭には、大道芸の技の披露、友の会ボランティアの紙芝居など手作りのお祭りとして敬老の日を挟む3連休多数の観光客に楽しんでいただきました。

「看守長屋の年中行事」は網走刑務所看守長屋を会場に日本の古き伝統行事を、博物館に訪れる全ての人を対象に実施し、ひな祭り、五月の節句、夏の七夕、秋の十五夜、年末の鏡餅作り、正月七草、鏡開き、節分と8回の行事を行い、季節の移ろいと日本人の知恵と工夫を感じてもらうこと、野外博物館の特徴を生かしたスケール感のある行事の再現を目的に行いました。海外からの見学者は偶然遭遇したイベント、特に七夕の竹流しそうめんには、夢中で参加してビデオを撮り続けていました。

(2) 企画展の開催

歴史館1階のスペースにて4月～9月まで「網走刑務所の戦時行刑作業～テニヤン島飛行場と美幌海軍飛行場」展を開催しました。昭和13年から始まった刑務所受刑者の海外派遣作業、その代表的作業であったテニヤン島飛行場と、海軍からの要請に応える形で行った美幌海軍飛行場建設の土木作業など戦時下での緊急防衛工事の労働力を補った網走刑務所の受刑者は、エリート熊部隊と呼ばれ労働力として貢献しました。現地での作業写真や同行した刑務官や教誨師の方から寄贈された資料を展示し戦後70年と重なり北海道新聞に連載され反響がありました。

10月～3月までは登録有形文化財の重要文化財昇格を目指して「文化財を繋げる技～瓦と煉瓦と石職人展」を開催しました。文化財建築の修復を支える職人の技を、瓦、煉瓦、石の製造過程とそれぞれの資材が、網走監獄のどの部分に使用され、どのような役割を担っているか、建築部材としての長所や短所を解説し、監獄の建造物に現れた石、瓦、煉瓦写真と道具を展示しました。

(3) 博物館網走監獄友の会

友の会は、監獄の歴史や建造物に興味のある方、博物館活動に興味あり博物館を支えるサポーターとして7年前から会員を募り現在個人会員40名法人会員11団体が入会されています。昨年度は、会員がボランティア活動を実践することが活動の柱でしたので、展示解説担当、イベントスタッフに分かれ自発的に行動し、グループ毎に勉強会を開催し、博物館活動を支援できるよう助成金を支出しました。ゴールデンウィーク、収穫祭ではバナナの叩き売り、紙芝居の口演、伝統遊具作りと様々な分野で即戦力となって活躍していただきました。

また例年の行事であります、中央道路開削慰霊碑清掃、二見桜並木の植樹、バス研修旅行、歴史勉強会なども合わせて行い、網走監獄で会員自らが楽しみながら生涯学習を実践しました。

(4) 展示見直し

① 庁舎

平成 27 年度庁舎内部展示改修工事実施に向けて、展示基本構想を作成しました。

昭和 63 年に移築復原したこの建物は、予算確保が難しい状態での移築であったため、接見室(面会室)を内部に入れるなど実際の配置と違うなどの問題があったため、接見室を一旦撤去し、いずれ外部に建築することとしました。

展示を大きく三分野に分け、接見室の場所に図書ライブラリーを設け見学者が知りたい情報を直接検索して見ることのできるタブレット端末を設置し、当館に蔵書のある書物については、棚に本を並べ手にとり自由に読むことのできるようにします。博物館の知識を広く公開するライブラリー機能を併設します。

二つ目は博物館に来館されたお客様が博物館の設立趣旨や、博物館が何を一番に伝えようとしているかなど、来館者が博物館の意図を汲み取れるようなガイダンスを担う場所として展示を構成しメッセージを発信します。

三つ目は、従来の典獄室を典獄が語るをコンセプトに初代大井上典獄が、網走監獄誕生から印象深いエピソードを回想し語らせるといった手法で見る人を明治の時代に誘い網走監獄の歴史を解りやすく伝えます。いずれの展示も外国人見学者にも理解していただけるよう 4 ヶ国語対応の解説を付加します。

② 休泊所

平成 28 年度建築を目途に、中央道開削現場の動く仮監、休泊所と呼ばれた建物の基本構想を作成しました。120 年前の網走監獄設置理由である網走から旭川までの 162・7km の開削は、国家プロジェクトであり、期限と予算の決められた過酷な道路工事でした。この工事の犠牲者は 211 人にも上り、この悲劇が網走監獄を日本一有名にしたと言えます。彼らが寝泊りをした小屋の図面を探し求めましたが、見つけ出すことができず、開拓期北海道の住居を参考に、元北海道工業大学教授で建築士の下村先生が建築デザインを作成しました。

この建築を中心に、240 日間のリアルな道路開削の現場と織り成す人間模様を作り上げていく予定です。

3 展示建造物の防犯・安全対策と固定資産の取得

平成 26 年度の固定資産取得にかかる事業は、施設の防犯安全対策と再現展示建造物の改修を進めたほか、施設各所の展示内容見直し作業に取り組みました。

平成 21 年度より、博物館施設全体の改修、建造物の保全に取り組み、一定の成果を挙げてまいりました。

文化財である旧網走刑務所建造物を維持することは歴史博物館としての命題ですが、博物館施設の快適性の向上、安全性の確保は財団運営に直結する施設集客（入館料収入確保）に大きく影響する課題でもあります。今後も中長期的視点に立ち、計画的な固定資産取得と管理に取り組みを進めてまいります。

- (1) 再現鏡橋の架け替え工事 入場口前の木造トラス付鏡橋は、木材の腐朽が著しく進行したために架け替え工事を実施しました。平成 25 年度に作成した実施設計書に基づき、疑宝珠つき欄干を有する二代目鏡橋をデザインモチーフとし、安全性確保と維持コスト軽減を目的に木材および鋼材を利用するハイブリッド工法を採用しました。（予算 25,000 千円・実績 29,104 千円）
- (2) 旧網走刑務所庁舎展示改修基本構想作成 平成 25 年度に内装リニューアルを実施した庁舎内部展示の基本構想を取りまとめました。（予算 1,080 千円・実績 972 千円）
- (3) 再現休泊所建替え基本構想作成 建設から 30 年以上を経過し、施設老朽化が進んでいるため再現休泊所の建替え基本構想を作成しました。（予算 740 千円・実績 499 千円）
- (4) 防犯防災設備の改修 館内監視システムの設備老朽化が進んだため、改修を実施しました。デジタルカメラ 36 台を設置、警備会社委託の機械警備と連動し、夜間も館内監視モニターが可能となり施設防犯機能を充実することができました。（予算 9,400 千円・実績 10,476 千円）
- (5) 歴史的建造物保全対策として平成 25 年度に行った移築建造物保全対策工事のうち、寒冷期になり未実施となった「五翼放射状平屋舎房」雹害対応屋根再塗装工事を継続して実施しました。（予算 5,810 千円・実績 5,509 千円）
- (6) 連絡用車両の更新 導入より 12 年が経過した連絡用車両を更新しました。省エネルギー、省コスト対策としてハイブリッド車を導入しました。（予算 2,500 千円・実績 2,537 千円）
- (7) 博物館収蔵資料台帳、図書管理台帳データベースを更新しました。（予算 560 千円・実績 551 千円）

4 経営の安定を図るため入館者の確保と収益事業の強化

当財団は、公益財団法人としての原則を堅持しながら、設立の経緯から自主自立の経営を進めてまいりました。このため、経営の安定を図るためには入館者数と入館料収入の確保と収益事業の強化は重要な課題であります。

入館者数については、国内は人口の減少が進む中で多くを期待する事はできないため、重点的に道内の個人型観光客の誘致と、訪日観光客の誘致に力をいれてまいりました。

平成26年度の数値目標を、入館者数で21万人（前年度予算比5%増）、入館料収入で184百万円（前年度予算比5%増）と設定してプロモーション活動を展開してまいりました。結果として入館者数で208,618人（目標比99.3%）入館料収入では185,099千円（目標比100.6%）となり、ほぼ目標を達成する事ができました。その内訳をみると入館者数では、全体で昨年度実績比3.7%増でしたが、国内の入館者数では同1.3%増にとどまりました。

また、重点目標としていた道内の個人型観光客の誘致は54,869人で昨年度実績比の7.4%増を数え、訪日観光客では27.2%増の22,811人で全体の10.9%（昨年度8.9%）を占め全体の数値を押し上げました。

具体的な誘致活動としては、新聞を媒体に道内2紙に7回（442,800円）市内4紙に18回（163,080円）、旅行雑誌3誌に7回（1,703,100円）を全国、全道に広告展開してまいりました。その他、旅行雑誌に無料記事協力22誌34回掲出してまいりました。

また、訪日旅行者への海外対策としては、北海道観光振興機構が参加している上海、韓国、マレーシア、台北で開催された旅行博に外国語パンフレットの参加をしております。その他、台北の旅行代理店18社へホテル、流氷館と一緒に誘客促進のために、プロモーションをしてまいりました。

来道したインバンド対策として国内観光客と併せて誘致用パンフレット（日本語、繁体字、簡体字、韓国、英語）を札幌駅西口の観光案内所に常時置くようにしている他、市内、近郊のホテル、道の駅、観光案内所、空港等にも置いております。また、市内のホテル・旅館には網走に宿泊していただいた方に対するサービスとして割引券を置いており、市内のホテル・旅館との連携強化を図ってまいりました。

テレビ取材については、国内5社の番組取材協力をした他、海外テレビ2社と雑誌の取材数社の協力をしてまいりました。

国内の旅行代理店対策と致しましては、札幌、東京、大阪、名古屋の旅行代理店を訪問し誘致活動を行ったほか、札幌での旅行代理店の総会、商談会へ6社

8回にわたり参加してまいりました。

収益事業会計については、売上目標を物産館の空き店舗を埋める事として、賃貸料収入を 6,667 千円（前年度予算比 16.4%増）、物販の売り上げを 22,630 千円（前年度予算比 7.8%増）として進めてまいりました。

その結果、物産館の空き店舗を埋めることができ賃貸料収入で 6,548 千円（目標比 0.8%減）で、ほぼ予算を確保することができました。また物販の売上は 24,674 千円（目標比 9.0%増）となり、旧庁舎の売店の改修と合わせ品揃えの効果が表れています。一方、食堂の売上も 16,485 千円（前年度実績比 7.0%増）となり、メニューの検討と入館者の増が全体の数値を押し上げています。